

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：12702

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580145

研究課題名(和文)文化人類学教育における映像メディアの創造的活用に関する国際的研究

研究課題名(英文)Visual Anthropology Studies-The Creative Use of Media in Cultural Anthropology.

研究代表者

村尾 静二 (MURAO, SEIJI)

総合研究大学院大学・学内共同利用施設等・研究員

研究者番号：90452052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文化人類学の教育と研究に映像メディアを創造的に活用するための手法と理論、その倫理的問題について明らかにすることを目的としている。その実現に向けて、西欧の教育・研究機関において映像人類学教育について実地調査を行い、国際的な学術交流を図り、また、そこで得た経験と知識をもとに研究メンバー自ら映像作品を制作することにより、これらの研究課題に取り組んでいる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the approaches and theory of creative use of visual media for education and research of cultural anthropology, and its ethical issue. In order to solve this purpose, study members conducted a survey for the education of visual anthropology in universities and research institutions of Western Europe, then did international academic exchanges with researchers there. In addition, based on the experience and knowledge that obtained in the research, study member made new ethnographic film.

研究分野：映像人類学

キーワード：映像人類学 メディア 教育 フィールドワーク 民族誌映画

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、世界は映像メディアによって覆い尽くされ、その結果、映像メディアを通して世界を理解することが日常的に行われるようになった。映像メディアは学術にも広く浸透しており、文化人類学においてもそれは例外ではない。暗黙知や非言語領域に宿る研究テーマが重要性を増すなか、文化人類学における映像メディアの役割は益々大きくなっている。

(2) 一方、このような状況が、映像メディアに関する共通理解がないままに進行しているのも事実である。過去の映像人類学の成果を踏まえつつ、映像を活用した文化人類学が今後どのように進むべきなのか、その方向性を明示することは、映像人類学はもとより文化人類学にとって急務の課題である。

2. 研究の目的

本研究では、映像メディアを文化人類学の教育と研究に創造的に活用するための手法と理論、その倫理的課題について明らかにする。そして、学生や研究者が応用できるかたちで提示することにより、文化人類学のなかに映像に関する共通理解を築いていく。その実現に向け、研究期間内に次の問題に取り組む。

(1) 現在、西欧の教育・研究機関では、文化人類学の教育と研究に映像メディアをどのように取り入れ、活用しているのか、実地調査により明らかにする。また、同じ問題意識をもつ海外の研究者と学术交流、人的交流を図り、共同でこの課題の解決にあたる。

(2) 研究成果として、研究報告書とともに映像作品を完成する。我が国には、文化人類学者が自ら制作した民族誌映画が少なく、映像教材が不足している。本作品がこのような状況を少しでも改善し、新たに映像を活用しようとする学生や研究者が増えることを願っている。

3. 研究の方法

本研究では、次の研究事項を通して、文化人類学の教育と研究に映像メディアを創造的に活用する手法を明らかにしている。

(1) まず、文化人類学の分野で映像教育の蓄積をもつ海外の研究・教育機関を訪問し、実施の様子を調査するとともに、現在、世界ではどのような人類学映像作品が制作されているのか、作品を中心に情報収集と動向調査を行う。

(2) 同時に、海外調査の際には、本研究メンバーのこれまで教育経験や研究蓄積を紹介し、交流を図るなかで、本研究課題の解決に向けての協力体制を築く。

(3) そして、本研究調査により得た経験と

知見をもとに、本研究メンバー自ら映像作品を制作し、公表する。それにより、日本の文化人類学・映像人類学教育の拡充に貢献する。

4. 研究成果

(1) 海外の教育・研究機関における調査どのような映像教育を推進するのか。

欧州で映像人類学に関して最も長い歴史、研究蓄積を有するのはフランスである。そこで、フランスのパリ第1大学ソルボンヌとエクサン・プロヴァンス大学を訪問し、映像人類学教育、文化人類学における映像メディア教育の実情について調査した。授業のなかで学生たちが映像作品を制作する現場にも立ち会い、教授陣とこの問題について意見交換した。

あらためて明らかになったのは、低価格で操作が容易な小型のデジタルビデオカメラは文化人類学においても研究から教育まで、広く活用されるようになってきているという事実である。多くの学生や研究者がビデオカメラを活用するようになっており、いまではスチールカメラと同じ程度に、ビデオカメラの活用が普及している。

撮影に関していうと、ビデオカメラとスチールカメラの操作方法は共通する点が多い。したがって、スチールカメラの操作に慣れていれば、そのままビデオカメラを使い撮影することが可能となる。実際に、多くの学生は初めてビデオカメラを使うときから、ある程度器用に撮影することができる。しかし、そのようなビデオカメラの扱い易さは注意すべき点でもある。学生たちは安易な撮影方法に陥ってしまい、大量の映像データを蓄積することになってしまうからである。

映像作品を完成するためには、個々の映像がどのようにつながり作品を構成しているのか、そのメカニズムについて事前に理解しておく必要がある。文化人類学における映像教育では、撮影が注目されがちであるが、むしろ編集についての教育が重要である。このような理由から、上記の大学では、今後、映像編集を重視した映像教育を推進していくという。撮影と編集はいずれも同等に重要な作業であるが、映像編集には、操作に関する専門的知識、論理性、美的感性が必要とされるために、その習得には撮影よりも多くの時間を要する。日本の文化人類学における映像教育では、まだ撮影を重視する傾向があるが、今後、編集教育を充実させることにより、学生が映像作品を完成する機会を増やすことは、日本の文化人類学教育にとって重要な課題である。

どのような映像作品を目標とするのか。

フランス、パリを中心として、映像人類学の教育ならび関連機関を視察し、文化人類学教育における民族誌映画を活用する可能性について調査研究した。

パリ第10大学ナンテールでは、民族学を専門とする二人の教授に対してインタビューを実施した。その結果、民族学を専門とする学生の研究課題と映像制作との関連性について、新たな視点を獲得することができた。

教授によると、多くの学生は映像を制作する際に、日常の生活世界にはあまり関心をもたず、儀礼や文化イベントなど非日常の出来事により大きな関心を寄せる傾向があるという。しかし、特別なものだという理由から非日常の出来事を撮影調査する前に、多くの時間をかけて日常の生活世界と向き合い、そこにみられる諸現象から民族の思考を探求するように学生を指導することが重要であると指摘された。現実には困難をとまなう教育指導であるが、日常と非日常の生活世界を等しく重要なものとして比較研究しながら現地調査を進め、映像を制作することが求められる。

また、研究者と現地の人々とが調査と映像制作に関して議論を積み重ね、共同で分析的探求を進めていくことができるような環境を確保していくことも重要である。「共有」に基づく調査と映像制作は、筆者が近年とくに関心を寄せている課題である。

シネマテーク、民族誌映画委員会のメンバーとは、民族誌映画の受容を前提とした映像教育に関して議論した。民族誌映画には大きく一般観客向けと研究教育向けがある。前者はプロ、セミプロの映像制作プロダクションが制作し、審美的かつ物語の展開を重視する傾向がある。一方、後者は学生や研究者が制作し、アマチュア主義に基づく独自の視点を重視する傾向がある。大学で研究教育向けの民族誌映画の制作を教育する際に先方機関が勧めているのは、最初に字幕や解説なしの映像を視聴することである。学生は映像を制作する際、文字に頼りすぎる傾向がある。したがって、文字がなければ理解できないものとは何か、それは本当に映像だけで表現することはできないのかを事前に知っておくことは、映像の可能性と限界を知る上で重要であり、学生が自ら映像を撮影・編集する際に大きく役立つものである。

(2) 民族誌映画の調査

良質の民族誌映画は文化人類学の教育において絶好の教材となる。しかし、どのような作品があるのか、その入手方法を含めて、日本ではほとんど知られていない。民族誌(エスノグラフィ)が授業で取り上げられ、基本教材になっているのに対し、民族誌映画(エスノグラフィック・フィルム)は未開拓のままである。

そこで、世界の映像人類学映画祭を代表する「ジャン・ルーシュ国際民族誌映画祭(Festival International du Cinema Ethnographique Jean Rouch)」(開催期間2014年11月4日~29日、開催場所Alliance française)に参加し、主催者へのインタビ

ューを通して、近年の民族誌映画と民族誌映画祭の動向に関して情報収集を行った。

本映画祭は、アメリカ自然史博物館で開催されるマーガレット・ミード映画祭と並び、国際的かつ社会的に知名度の高い映像人類学映画祭である。これらの映画祭では、これまで、上映作品の多くは文化人類学者が制作した映像作品であり、そのなかには、文化人類学を研究する学生や若手研究者が自ら制作した作品も多く含まれていた。アマチュアであるがゆえにスポンサーの意向に従う必要はなく、自身の見解と感性に忠実に制作された彼らの作品は、プロの映像制作会社では制作できない個性と魅力で溢れていた(これらの作品を「アマチュア主義」という言葉でとらえることもできよう。ここでは、映像人類学の基礎を築き、本映画祭の設立者であるフランスの民族学者であり映画作家でもあるジャン・ルーシュ自身も含まれる)。

一方、近年、上記のような国際的に名高い映画祭では、アマチュアによる作品が上映される機会は減る傾向にあり、そのかわりに、プロ、セミプロの映像制作プロダクションにより制作された作品が多くエントリーされ、上映されるようになっていく。高い映像技術に裏付けられた彼らの作品は、とても審美的であり、登場人物の設定やドラマティックな物語の導入により、一般の観客にも内容を理解しやすく、感情移入できる構成になっている。

アマチュア主義に基づいて制作された作品の上映が減り、このようなプロ、セミプロの映像制作プロダクションの作品の上映が増える傾向は、世界中の民族誌映画祭に広く確認できるようになってきた。その理由は、民族誌映画を受容する際に、審美性やわかりやすさを重視する観客が増えており、一方、アマチュア主義の特徴である、審美的ではないがフィールドワークの生々しさが描かれていたり、個性的なものの見方が提示されているといった点は、評価の基準として忘れられようとしているかのようなのである。文化人類学の授業における映像制作教育、そして、将来日本で国際民族誌映画祭を開催する際に、民族誌映画を評価する基準をどのように設定すべきかに関して、多くの重要な視点を獲得することができた。

(3) 海外研究者との学術交流

本研究メンバーは、民族誌映画の制作経験があり、国内外の教育・研究機関において、映像メディアを活用した教育経験を有する。また、学術に映像メディアを効果的に活用するための研究会を組織してきた経験があり、映像人類学の分野において世界に向け提示することのできる独自の研究成果を有している。そこで、海外調査の際には、ワークショップを開催し、本研究メンバーのこれまでの研究成果や映像作品の上映と意見交換を行い、本研究課題の解決に向けて積極的な人

的交流を図ることにした。

フランス、パリの日本文化会館において、大森自身が日本とフランスで制作してきた民族誌映画の上映会を開催した。開催期間を通して200人を越える参加者を迎えることができた。日本文化研究者、民族学者、そして一般の人々など参加者は多岐にわたり、上映講演、ディスカッションを通して、日本における映像人類学の教育と研究について意見交換する貴重な機会となった。日本文化会館での民族誌映画上映会は今後も継続していく予定であり、この活動を通して、日本における映像人類学の成果を欧州社会に伝えていくとともに、そこで育まれる人的関係を両国の映像人類学の発展に活かしていきたい。

(4) 映像作品の制作

欧州の教育・研究機関での調査により得た経験と知見を参考にして、映像人類学調査を進め、新たに映像作品を制作した。

村尾はこれまで文化人類学調査を続けてきたインドネシア、バリ島にて欧州での体験をもとに映像制作のアイデアを発展させ、新たに映像作品『光と影に生きる - ワヤン・クリとダランの生活世界』(出演 = イ・ワヤン・デレス、監督 撮影 編集 = 村尾静二、ハイビジョン、60分、2015年。)を完成、公表した。

映像の制作は三つの過程(プレ・プロダクション、プロダクション、ポスト・プロダクション)から構成され、それぞれの過程は複数の作業により構成される。今後の課題としては、各々の制作過程にはどのような創造的可能性が宿り、また、どのような点に注意して制作を進めるべきなのかを、本作品を制作したときの経験を捉え直し、構造化することにより、これから映像制作をしようとする学生・研究者に資することである。

(5) 研究成果の公表

フィールドワークは文化人類学の領域を越え、社会学や民俗学などの隣接分野も越え、人文社会から自然科学まで学際的に使われる研究手法となった。それと同様に、現在、映像人類学は学際的に広く注目を集めている。そのなかでも、特に大きな関心を寄せているのは芸術の領域においてである。

村尾が制作した『光と影に生きる - ワヤン・クリとダランの生活世界』は、東京芸術大学がインドネシア、バリ島で開催したグローバルアートプラクティスにおいて上映される機会を得た。人類学者、アーティスト、そして、撮影対象である現地の人々が集い、映像作品の内容、制作過程、そして、これから本作品のテーマをどのように継続的かつ発展的に映像化していくのかについて議論し、多くの貴重な示唆を得ることができた。

なかでも、「共有」の実践についての議論は、これからの文化人類学にとっても大いに役立つものである。本研究メンバーは『映像

人類学(シネ・アンソロポロジー) - 人類学の新たな実践へ』(村尾静二・箭内匡・久保正敏編、せりか書房、2014年)の執筆メンバーでもあるが、本書の中心にあるキーワードこそが「共有」であった。そして、芸術学においても「共有」に基づく実践はとても重要な課題であるという。文化人類学と芸術学はこれまでも様々な共同作業を行い、新たな研究課題を築いてきた。「共有」はそれらに連なる重要な研究課題であり、それを新たに認識することができたことは、本研究を発展させていく上で大きな意味をもつ。

以上、本研究により得た経験と知識は、適宜、大学における文化人類学の教育と研究にフィードバックしていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

村尾静二、身体文化に基づく国民文化の形成 - インドネシアの伝統的身体技法プンチャック・シラット、MOUSEION、立教大学、査読なし、No.61、2015、1-14。

〔図書〕(計1件)

分藤大翼、川瀬慈、村尾静二、フィールド映像術、古今書院、2015年。
担当箇所:「学術映像の制作に向けて - 文化科学・自然科学における学術映像制作の基本的問題」28-41。

〔その他〕(計2件)

国際的上映活動
東京芸術大学グローバルアートプラクティス「熱帯のアトリエ」展(Tokyo University of the Arts, Global Art Practice, Tropical Atelier)

日時:2015年3月25日

場所:インドネシア共和国、バリ島、ギャニャール県、テガララン村、アランアランハウス

発表者:村尾静二

上映作品:『光と影に生きる - ワヤン・クリとダランの生活世界』出演 = イ・ワヤン・デレス、監督 撮影 編集 = 村尾静二、ハイビジョン、60分、2015年。

国際的上映活動

大森康宏とともに民族誌映画の新発見をしよう(Le Cinema Ethnographique Japonais Rencontre avec Yasuhiro Omori)

日時:2016年3月18,19日

場所:フランス、パリ、日本文化会館

発表者:大森康宏

上映作品:『私の人生マヌーシュ』59分、1976年、『20年後のマヌーシュの生活』86分、2006年、『霊場恐山』83分、1993年、『工藤タキ 津軽イタコの場合』78分、1997年(いずれも、

監督は大森康宏)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

村尾静二 (MURAO SEIJI)

総合研究大学院大学 学融合推進センター

客員研究員

研究者番号 : 90452052

(2)研究分担者

大森康宏 (OMORI YASUHIRO)

国立民族学博物館 名誉教授

研究者番号 : 00111089